

# 日本語学習者の物語文再生における 時間的表現の概観

西村 よしみ

## 1. はじめに

第二言語学習者（以下学習者）は、事柄の時間的表現、あるいは事柄間の接続関係をどのように習得していくのだろうか。初級日本語の授業では、時の推移・継続や接続詞に関する表現を学習する。500時間の集中授業とはいえ、初級段階においては、談話の展開や構成に関する指導は十分されているとは言えない。しかし、学習者が書いた作文を見ると、時間表現あるいは接続関係が多くの誤用と共に表現されている。本稿では、留学生センターの予備教育コースの最終テストの一部である作文課題の絵物語に関する学習者の再生記述と日本人が書いたものを比較検討し、再生された物語文における文の時間情報の記述文と文の時間的接続関係の記述という2点に焦点を絞って検討する。

まず、なぜ物語文を題材にしたかについて簡単に触れておきたい。物語の中では、主人公の周辺に様々な出来事や状況が生起する。そして、それらは因果的關係や時間的關係によって関連しながら問題解決へと終結していく。物語を縦に貫く時間軸が物語の「読み手」の理解を支え、出来事や状況の生起、継続、同時性などが「読み手」に容易に意識化される。したがって、物語文の再生においても「書き手」は時間軸に従って出来事や状況を記述していくことが求められる。

従来、物語文の理解、記憶、要約など心理学的研究が数多く報告され、第一言語習得過程や子供たちの認知的枠組みの発達過程に関する研究成果が十分に蓄積されている。また、自然言語処理の研究においても時間関係情報の分析や接続詞生成の資料として物語文が使われている。日本語教育では、物語文と第二言語習得過程を関連づけた報告はまだ見られない。しかし、物語文は、本研究の目的である文の接続関係や、視点の問題、一人称の役割など談話研究に興味ある様々な切り口を提供し、第二言語習得過程を研究する上で、貴重な資料

であるといえる。

本稿では、Thorndyke (1977) の物語文法を採用し、出来事の時間的表現および出来事間の時間的関連表現の検討する。Thorndyke は、物語文の理解の過程で、「読み手」はこの文法を使って、文字情報を既有知識に結び付け、推論を行い、より具体的に出来事や状況を理解し一貫性のある解釈を行っている」と述べている。本研究では、文字情報の代わりに視覚的情報である6コマの絵ストーリーを学習者に渡し、そこに描かれている物語を再生記述したものを資料として採用した。

## 2. 物語文とは

一定の筋書きをもった物語は、内的表象を構成する際に入力情報を処理する物語文法(Thorndyke, 1977)と呼ばれる知識が働くと仮定されている。Thorndyke は、物語文に共通するプロットやエピソードの構造には一定の規則、すなわち、設定→出来事→主人公の内的表象→問題解決の試み→試みの結果という一連の時間的経過に沿った展開とその事柄間を結合する論理的規則が存在すると主張する。読み手は、その規則によって、因果関係や結論などを予測し、これらを「物語カテゴリーに対応させ入力情報をチャンク化して符号化し、物語の展開についての表象を構成する」(内田, 1982)としている。この物語文の規定構造を明らかにする規則、すなわち物語文法を設定することは、ある種の物語は内容に依存しない確固とした構造があり、文章理解では外部からの入力情報を内的表象へと構成するにあたって物語文法を利用しているという前提がある。この物語文法が果たして文法と呼べるものであるかについては、Johnson-Laird (1983) が批判を行っているがここでは触れない。

### 2.1 Thorndyke の物語文法

Thorndyke の提案した物語文法は、物語の構造を生成する「統語規則」と意味を決定する「意味的解釈規則」の集合であるとし、表1のような定式化を行った。

この文法規則の意味は次のようなものである。

- 1) 物語には場面の設定、主題の設定、プロット、結末という要素がある。
- 2) 場面設定には、人物、場所、時間という下位の要素があり、この順番で出

表1 Thorndyk の物語文法規則

規則番号	規	則
1	物語	→ 場面の設定+主題の設定+プロット+結末
2	場面の設定	→ 人物の設定+場所の設定+時間の設定
3	主題の設定	→ (できごと) + 目標の設定
4	プロット	→ エピソード
5	エピソード	→ 下位目標の設定+達成への試み+結果
6	達成への試み	→ できごと エピソード
7	結果	→ できごと 状態
8	結末	→ できごと 状態
9	下位目標の設定 目標の設定	→ 望ましい状態
10	人物 場所 時間	→ 状態

てくる。

- 3) 主題の設定は、いくつかの「できごと」と「目標設定」によって構成され、この順序に従って生起する。
- 4) プロットはいくつかのエピソードで構成され、エピソードは下位目標の設定、達成への試み、結果の順に出てくる。

このような規則に従って、上位の要素を下位の要素へと分解し、この要素が変数となり、その他の情報（順番など）が定数となる。各変数には変数値としてのアイデアユニット（以下 IU）群が当てはめられる。このIU群を値として、物語全体がこれらの階層構造として、読み手に提示されるとThorndykeは述べている。

Thorndykeの行った実験は、プロット構造の違いによる物語文の理解の記憶への影響の検討である。2つの物語文で4タイプのプロット構造をもつ文章を作成し、再生と要約課題を被験者に課した。結果は、階層構造を持つ物語文が、再生にも要約再生にも好結果をもたらし、再生や要約に出現するIUは階層構造の上位に規定されているということであった。

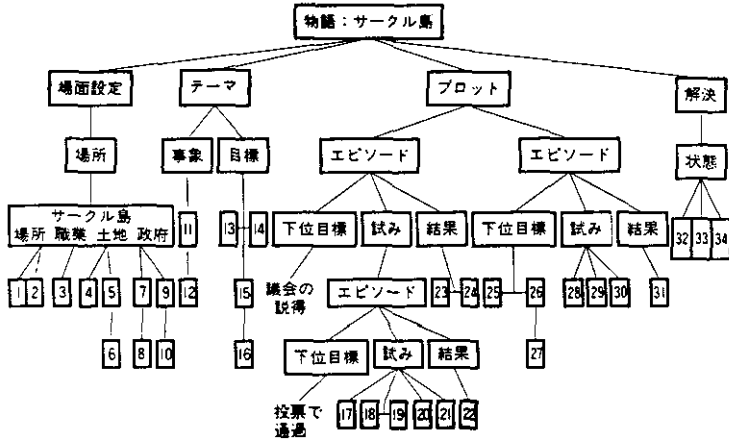


図1 Thorndykeの実験で使われた「サークル島」のプロット構造

## 2.2 アイディア・ユニット (IU) について

### 2.2.1 IUの認定基準

Thorndykeは、物語文法の各要素を変数として規定し、変数値をアイディアユニットとした。この節では、IUについて検討する。

IUは、心理学や日本語教育でも要約文の再生とか記憶の影響を検討する際に、よく使われる概念である。しかし、一般には、「1項+1述部」のように記されているものが多い。しかし、要約文における再生の判定をIUを使って行う場合はより明確なIUの認定基準が必要となる。本研究では6コマの絵ストーリーに想定されるIUを予め筆者が設定し、それが学習者の再生文にどのような表現形で記述されるかを検討する。それ故、IUに関してはより具体的な検討が必要になってくる。

表2は、邑本(1992)のものを参考に筆者が基準を設定したものである。

### 2.2.1 IU群記述の質的分類

再生記述された文中には、個々のIUが様々な表現が表れている。そこで、筆者が設定したIUを被験者が記述に際し、どのような形に変化させているかを検討する場合、質的な分類が必要である。邑本(1993)は、要約文の多様性についての実験を行った際に、もとのテキスト文のIUが要約文にどのように表現されているかを以下の12に分類し分析を行っている。本研究も邑本のカテ

表2 IU 認定基準

- |    |   |
|----|---|
| 1) | 基本的に単文を1つのIUとする。重文は2つ、複文は従属節が時間的關係を表す場合、2つのIU、それ以外は1つ。                          |
| 2) | 連用修飾の句や節は原則として独立のIUとはしない。   |
| 3) | 連体修飾の句や節については、内の関係である場合は、底の名詞の後、外の関係では、底の名詞の前を認定単位とする。                          |
| 4) | ～ことを知る、～と思うなどのような埋め込み文は、全体をIUとする。カ所に複数の文が埋め込まれている時には、分割し同一の述語を取りうる場合のみ独立のIUとする。 |
| 5) | 文中で複数回言及されている修飾句・節については、それらを独立のIUとする。   |
| 6) | 原因、目的手段を表す名詞は独立のIUとする。  |
| 7) | 引用の表現（と、ように、とか）は、引用成分の前を独立のIUとする。   |

ゴリー分類に基づくが、分類の内容記述は多少異なる。

- |          |  |
|----------|--|
| 1) 同一表現  | 筆者によって設定された表現と全く同じ表現が用いられているもの。  |
| 2) 類似表現  | 設定したIUとは用いられている述語は同じであるが、ヴォイスやアスペクト、ムードなどが異なるもの。   |
| 3) 言換え表現 | 設定したIUと意味的にはほぼ同じであるが述語がことなるもの。「帽子を売っています」→「帽子を持っています」  |
| 4) 脱特定化  | 設定したIUではかなり特定化されているが、その特定情報を表現 欠いて表現されているもの。項と述部の特定化がある。前者は連体修飾部の欠落、後者は連用修飾部の欠落あるいは修飾の程度の弱化。 |
| 5) 抽象化表現 | 設定したIUの述語が抽象化され、もとのIUのもつ具体的意味を欠いているもの。   |
| 6) 具体化表現 | 設定したIUよりも具体化されているもの。   |
| 7) 合成表現  | 設定した複数のIUをそれぞれのIUの具体的意味を保持させて表現させたもの。  |
| 8) 統一表現  | 設定した複数のIUをそれらすべてのIUの具体的意味を保持せず抽象化されたもの。  |
| 9) 推論表現  | 設定されたIUに明示されていないが、容易に推論可能なもの。  |

- 10) 個性的表現 設定された IU には明示されておらず、内容とは矛盾しないが容易に推論できないもの。
- 11) 物語外表現 物語そのものではなく、記述者の評価やコメント。
- 12) 誤り表現 物語の内容と明らかに矛盾するもの。

### 3. 事柄と事柄間の時間的表現について

再生記述文の時間的情報をどのように分類するかを枠組みを検討する。日本語学や日本語教育学において、時間的表現と意味に関する研究としてはテンスやアスペクトについて数多くの報告がある。寺村（1984）を参考にし、まとめの枠組みとしては仁田等（1983-1985）を参考にしつつまとめた。

なお、下線は『Situational Functional Japanese』Vol. 1-3で学習した時間表現である。これららの表現をもとに再生記述文に表現されている出来事についての時間的情報や接続情報を拾い出していく。

#### 1) 動詞の語彙的な意味

- ◎ 状態事象
- ◎ 動的事象
- 二者間の関係
  - 働きかけ
  - 対象に対する態度
  - 相互動作
- 移動・変化
  - ・移動「出る」「通る」「入る, 着く」「行く・来る・返る・戻る」
  - ・変化「かわる」「化ける」「なる」

#### 2) 動詞のテンスとアスペクト

- ◎ テンス 状態 状態の継続  
動的事象 現在 過去
- ◎ アスペクト
  - 一次的アスペクト
  - 二次的アスペクト テ形に接続する補助動詞  
「～ている」「～である」「～ていく」「～てくる」
  - 三次的アスペクト 時間相  
開始 「～はじめる」「～だす」

継続 「～つづける」

終了 「～おわる」「～やむ」

空間相 「～のぼる」「～あがる」「～くだる」  
「～おりる」

### 3) 時の名詞

事態の成立する時点・時期を示す：

きのう—きょう—あした—あさって、先週—今週—来週—再来週—去年—今年—来年—再来年、前日—当日—翌日、その前—その時—その後、その日、その年、次の年、むかし、ある年、ある日、今、最近、近頃、1996年11月10日、11時、11時頃

### 4) 時の副詞

発話時を基準とした時期・時点：

さっき、かつて、かねて、いまに、ちかぢか、いずれ、のちのち

時間量：しばらく、しばし、ながらく、いつまでも

頻度：たえず、しじゅう、しょっちゅう、しばしば、しきりに、たびたび、よく、ときどき、たまに

経験回数：はじめて、何度も、一度、一度も、ふたたび

恒常：いつも、つねに、つも

未完了・完了：もう—すでに—とっくに、まだ、いまだに

基準時から動作や変化の起こるまでの時間量：

すぐ、じきに、ただちに、やがて、まもなく、同時に、とつぜん、急に、ふいに、いきなり、やっと、ようやく、とうとう、ついに、いつのまにか

変化の進行：しだいに、じょじょに、だんだん

複数の累加：ぞくぞく、つぎつぎ

状態の継続：ずうっと、あいかわらず

### 5) 時間の接続詞・接続助詞接続句

接続詞：そして、それから、すると、それで

接続助詞：て、と、ながら

接続句：～するやいなや、～するがはやいか

### 6) 時の形式名詞

時期：とき、ころ、おり、あと、まえ

期 間：あいだ，うち，から—まで，

頻 度：たび（に），ごと（に）

7) 時の文・節：時間的情報を表現する文や節

時点・時期：ある日のことでした。

期 間：一年，二年たちました；少したつと

## 4. 調 査

### 4.1 調査方法

図3の6コマの絵を見せ、30分で物語文を書かせる。但し、「帽子売りのおじさんと猿」という表題は、表題による内容の推測を防ぐため提示しない。6個の語彙を英語の意味と共に与えた。調査の開始時に、その絵の内容を「子供が読む物語のように書いて下さい」と指示した。また、レベル1の作文の時間には、補助資料として、物語文の他に、おじさんと猿の視点で書くように指示した。

### 4.2 対象と資料収集

日本人 4人。なお、資料は酒井たか子氏の提供。

留学生 ① 初級日本語の外国人留学生23人

当留学生センターの予備教育コースで、初級日本語500時間修了時の最終テストの一部の作文課題。

② プレイスメントテストの結果による、レベル1の作文の7人の外国人留学生。筆者の作文1のクラスにおいて60分の時間で書かせた、この場合参考資料として、物語文だけではなく、おじさんの視点、猿の視点から書くようにという指示を与えた。従って、60分間に3つの作文を書いたことになる。

### 4.3 分析方法

以下の3つの分析方法によって被験者に物語文を分析した。方法としては、量的、質的、記述的分類を行った。なお、被験者の再生文は多くの誤用を含んでいる。しかし、それらの誤用をどのように判断し分類するかということについて筆者は明確な検討を行っていない。したがって、本稿では、誤用であっても被験者が表現したもしくは、表現しようとした時間情報を資料として抽出した。



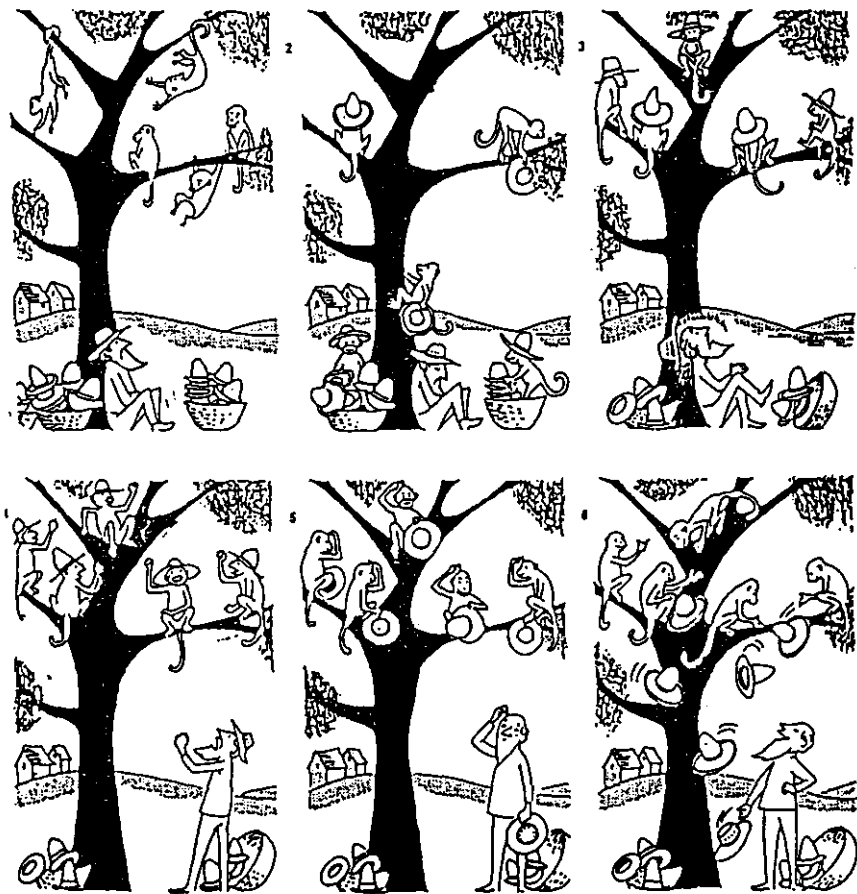


図2 学習者及日本人に提示した絵物語

だが、今後の誤用分析の研究の資料として分析する場合を考え、時間情報や接続情報を詳しく記述した。

- 1) 記述された文章を筆者が予め設定したIUに区切り、IUの表現形式の出現数を調べる。
- 2) 被験者の再生文の時間情報と接続関係情報を記述し、分類を行う。
- 3) 再生文に表れたIU群の質的な分析を行う。

### 4.3.1 IUの設定

表3は、絵ストーリーを見て、筆者が設定した25のIUである。IUの記述を現在形で表したのは、時間情報を調べる際に [[3 (IUの番号)] <テンス> 過去 <アスペクト> ~ている] のように情報記述するためである。

### 4.3.2 IUの表現形式と総数

被験者が記述した物語文を表2のIUに分類する。その時、単文をSとし、また、重文あるいは複文をCとした。ここで、重文と複文を区別しなかったのは、その後の分析、において各IUの記述内容を分析するので、概観するにとどめた。複文や重文で記述された文には、二つのIUの重なりがある。その場合は、c1c2と1コラム内に重なりを記した。また、学習者が付加した物語外表現は、Eという欄を設けそこに記入した。(資料1, 参照)

### 4.3.3 IUの時間情報の記述

3章において述べた時間表現の枠組みを用い、被験者の再生文中に表現された各IUの時間情報を下のように記述した。但し、設定されたIUの動詞と同一の動詞が記述されているときは、省略した。

- a. おとこのひとは本(ママ)のしたに止まりました。  
[[3] : 動詞(止まる) <テンス> 過去]。
- b. いつも木のちかくにやすみます。  
[[E] : <テンス> 非過去 副詞 恒常 (いつも)]。
- c. ある日、おじいさんが木の下に休んでいました。  
[[3] : <テンス> 過去 <アスペクト> ~ている 名詞(ある日)]。

### 4.3.4 IU間の接続関係の記述

接続関係は以下のように記述した。

- a. (日本人)  
おじいさんはほんやりそれ(木の上の猿)をながめていました。そのうちに、おじいさんは眠くなってしまいました。すると、猿たちはいつのまにか木からおりて来ました。  
[[E]]。そのうちに, [[7] 変化 動詞 (~くなる) <テンス> 過去 <アスペクト> ~てしまう]。すると, [[8] <テンス> 非過去 <アスペクト> ~てくる 副詞 (いつのまにか)]。

表3 「帽子売りのおじさんと猿」のIU群

IU No	アイディアユニット
1	ある日のことだ。
2	大きな木がある。
3	おじさんが木の下で休んでいる。
4	おじさんの近くに帽子のかごがある。
5	木の上ではたくさん猿が遊んでいる。
6	おじさんは帽子を売っている。
7	おじさんが眠った。
8	猿が木から降りる。
9	猿がおじさんの帽子を取る。
10	木の上でかぶって遊ぶ。
11	おじさんが起きる。
12	帽子がないことに気がつく。
13	猿が帽子をかぶっているのを見る。
14	帽子を取り戻したい。
15	おじさんが怒る。
16	猿がまねをする。(怒る)
17	猿は帽子を返さない。
18	おじさんが頭をかいて考える。
19	猿がまねをする。(頭をかく)
20	猿は帽子を返さない。
21	おじさんは考える。
22	おじさんが帽子を捨てる。
23	猿がまねをする。(帽子を捨てる)
24	帽子がおじさんに戻る。
25	おじさんは喜ぶ。

## b. (外国人)

ねているとき、さるはぼうしをとりました。あとで、おとこの人はおきます。

[[7] 〈アスペクト〉～ている] とき, [[9] 〈テンス〉過去]。あとで, [[11] 動詞(おきる) 〈テンス〉過去]。

## 5. 結果と考察

### 5.1 IUの表現形式と数

留学生の日本語能力により、成績上位群、中位群、下位群の3つに分けた。留学生の日本語能力を、予備教育留学生は500時間修了後の最終テストの成績、補講作文1の学生はプレイスメントテストの成績で判定した。なお、最終テストとプレイスメントテストを同時に受けた学生が5名いたので彼らの成績を基準に最終テストとプレイスメントテストの関連を見て3グループに分けた。

資料1は留学生被験者のIUの表現形式（単文か重複文か）とIUの記述順序である。表4は再生文中のIUの出現率である。次のような結果が出た。

- 1) 日本人は、設定されたIUを単文で表現するより、重・複文によって表現し、記述されているIUも多い。
- 2) 成績下位群の記述はIUを単文で繋ぐ傾向があり、中位から上位に行くにつれて重複文の出現数が多くなる。

表4 IUの出現率と日本語文法能力

	下位	中位	上位	日本人
IUの出現率	34%	56%	72%	85%

### 5.2 IUの時間表現

3章において検討した時間に関する表現がどのような形で被験者の再生文に記述されているかを量的に検討した。（資料2）

動詞に関しては、下位グループでは、アスペクトの出現が少なく、特に「～てしまう」や「～ていく～てくる」などはほとんど記されていない。一方、日本人の記述では、「～てしまう」の完了、「～ていく～てくる」移動の表現が適所に配置されている。この「～てしまう」や「～ていく～てくる」が使えるようになり始めるのは、上位グループぐらいからであろう。

「時の副詞」は、留学生で記述文で使用できたものは、「すぐ」と「急に」の二つである。日本人の時の表現を見ても、「すぐ」と「急に」の使用頻度が高い。これは、この物語文では、「基準時から動作や変化の起こるまでの時間量」を表す表現しか出てこないという素材の限界から来るものであろう。

「時の接続詞」については、下位グループでは、接続詞なし。その代わりに、各文章に番号を記し、時間的配列を行っていたり、6コマの絵に番号をつけ、「(4)と(5)は、さるがまねをします。」というような学習方略を使って、時間の経緯を示そうとしている。いずれにしても、「そして」「それから」二つの系列に別れる。一方日本人は、「いつの間にか」とか、「そのうちに」、「すると」など、期間や場面的展開を示す副詞が共通に使用されている。「時の接続助詞」は、留学生の記述から平均して見られるものが「～て」である。「～と」を使用しているのは4名である。日本人の記述の中には、「おじいさんが帽子を取ると、猿も帽子を取りました。」のように、おじいさんと猿の行動をセットとして表現できる時には、「と」が記されている。

### 5.3 IUの質的分析

筆者が予め設定したIUがどのような表現として再生文に記述されているかという質的な分析に入る。(表5)

下位群の特徴として、「類似」「言い換え」「脱特定化」表現が多いことである。この傾向は、使用できる日本語の知識領域が小さいため、述部の動詞をより基本的で平易なものへ行く傾向、設定したIUでは特定化して表現している部分を省略し、回避する傾向がある。

例) 設定IU おじいさんは、木の下で休んでいる。

被験者 おとこのひとは、ねました。

この例は、述語の「休む」という動詞が分からなかったために、「ねる」という動詞で置き換え、また「木の下」という場所の設定部分を省略して記述している。また、「言い換え表現」では、アスペクト情報、「～てくる」「～てしまう」などを、過去形ですませしてしまう傾向は、下位群の特徴だと言える。また、上位にいくにつれて、「統一」「合成」などの特徴が見られる。

- a. おとこの人が手をあげたり、帽子をとったりしているのをさるがまねました。
- b. おとこの人がぼうしを取ると、さるも取りました。
- c. おじいさんがおこりました。さるもおこりました。

aとbが上位群、cは下位群の外国人被験者の記述である。「同一動作」の繰り返しが、c→b→aへと移行しているのは興味深い。

また、中位、上位群に見られる「具体化」によって、表現がより記述的になり、面白さを増す。

さるさんは、いつもたくさんのこと、人と同じです。(物語外)  
 たとえば、ぼうしをかぶれるし、いろいろな人がすることをまねります。  
 (具体化・統一化)

表5 IUの質的分析

	下位群	中位群	上位群
同一表現	13	29	13
類似表現	28	18	2
言い換え	29	24	1
脱特定化	34	21	13
抽象化	1	3	4
具体化	0	8	16
合成	14	19	31
統一	1	3	9
推論	0	10	13
个性的	0	1	1
物語外	9	10	19

#### 5.4 IU間の接続関係

各IU間の接続関係がどのように表現されているか、2つのブロックを対象に検討してみる。(図3 階層構造の網掛けの部分)

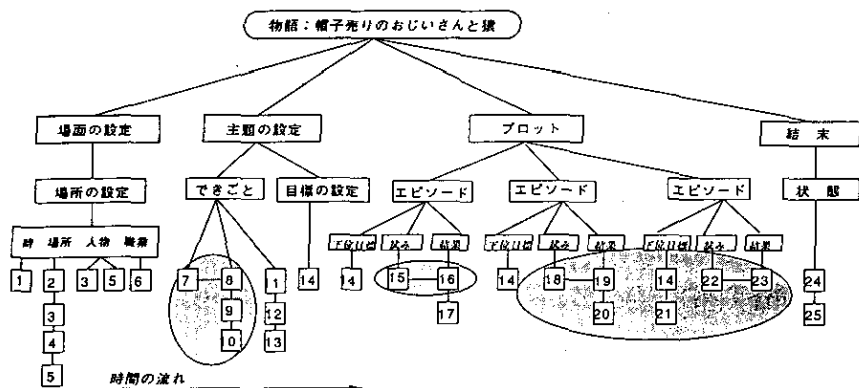


図3 「帽子売りのおじさんと猿」の階層構造

あらかじめ、筆者が想定したIUの内容は以下のものである。

- |    |                    |
|----|--------------------|
| 7  | おじいさんが眠った。         |
| 8  | さるが木から降りる。         |
| 9  | 猿がおじいさんの籠の中の帽子を取る。 |
| 10 | 木の上で遊ぶ。            |

IUの7番から13番の再生された接続関係は、以下のようになっている。

日本人

- A) [[7] <テンス> 非過去 <アスペクト> ~てしまう] と  
 [[8] <アスペクト> ~てくる] て  
 [[9] <テンス> 非過去 <アスペクト> ~てしまう]。
- B) [(さるをながめていました)]。  
 そのうちに, [[7] 変化 <テンス> 過去 <アスペクト> ~てしまう]。  
 すると, [[8] <テンス> 非過去 <アスペクト> ~てくる] て  
 [[9] <テンス> 非過去] て  
 [[10] 動作の繰り返し <テンス> 非過去 <アスペクト> ~はじめる]。
- C)  
 いつの間にか [[7] <テンス> 過去 <アスペクト> てしまう]。  
 すると [[8] <テンス> 非過去] て  
 [[9] <テンス> 非過去] て  
 [[10] <テンス> 過去 <アスペクト> ~はじめる]。

図式化すると、以下のようになる。

3	うちに								
	そのうちに	7	すると	8	て	9	て	10	~てしまう
	いつの間にか		と						~はじめる

一方、留学生の接続のパターンは以下の三つに分けられる。

## 【Rタイプ1】

7。とき — 9。 て — 10。

## 【Rタイプ2】

?あとで それで  
?あと 7。 9。 10。  
そのあと 7。 9。 10。

## 【Rタイプ3】

7。 9。 10。

## 【Rタイプ1】

二次的アスペクトの使用が多く、時の名詞、形式名詞が使用できる。成績上位

- D) [[7] <テンス> 非過去 <アスペクト> ~ている] とき,  
[[9] <テンス> 過去 <アスペクト> ~ていく].  
[[10] <テンス> 過去].
- E) その時 [[7] <テンス> 過去 <アスペクト> ~ている].  
[[9] <テンス> 過去 <アスペクト> ~ていく]
- F) [[7] <テンス> 非過去 <時の副詞> すぐ].  
その時 [[8] <テンス> 非過去] て,  
[[9] <テンス> 過去 <アスペクト> ~ていく]
- G) (?) いつ [[7] <テンス> 非過去 <アスペクト> ~ている].  
[[9] <テンス> 過去 <アスペクト> ~ている].



あとで [[10] 〈テンス〉 過去]。

### 【Rタイプ2】

英語の“After”の干渉が見られるが、「それで/ですから」などの接続詞を用いて、IUの接続を行う。成績中位

H) (?) あとで [[7] 〈テンス〉 過去 〈アスペクト〉 てしまう]。

それで [[10] 〈テンス〉 過去]

I) (?) あとで, [[7] 変化 〈テンス〉 過去]。

ですから, [[9] 〈テンス〉 過去] て

### 【Rタイプ3】

単文のみの配列によって、時の経過を表現する。なお、例(J)の文頭の番号は学習者が記したもので、これは時の経過が文レベルで出来ない時の一つの方略であろう。成績下位

J) 5 [[7] 〈テンス〉 過去]。

6 [[9] 〈テンス〉 過去]。

7 [[10] 〈テンス〉 過去]。

K) [[7] 〈テンス〉 過去 〈アスペクト〉 ~ている]。

そして [[10] 〈テンス〉 非過去 〈アスペクト〉 ~ている]

次に、IUの18番から23番の接続を見ると以下のようにになっている。

- |    |                          |
|----|--------------------------|
| 18 | おじいさんが頭をかいて考える。          |
| 19 | 猿がおじいさんのまねをする。(頭をかく)     |
| 20 | 猿は帽子を返さない。               |
| 21 | おじいさんは、「猿まね」ということに気が付いた。 |
| 22 | おじいさんが帽子を捨てる。            |
| 23 | 猿がまねをする。(帽子を捨てる)         |

日本人

- L) [15] そうすると, [[16] + [19]]. [21] で, [22] そうすると [22]  
 M) [18] と [19] そこで [21] そして [22]。すると [23]  
 N) [18] すると [19] そこで, [21] て [22]。そうしたら [23]。

留学生

- O) [18] [[19] も] そのとき [21] つぎ, [22] [23も]  
 P) [21] あとで, [22]。[同じように [23]]。  
 Q) [22] そうしたら, [23]  
 R) [[21] ため [18]] その時, [[19] も]。[22] [[23] も]  
 S) [22] と [23]  
 T) [22] そして [23]  
 U) [22] 時 [[23] も]

再生されたIU間の接続関係には、以下のような傾向が見られた。

- 1) 句点結合。(下位群)
- 2) 句点結合の場合、主語が違って同じ動作が繰り返される場合、「も」を使う。(下位群)
- 3) 接続詞を使う。句点結合の次のステップとして「そして」で接続するものと「それから」を使う場合がある。
- 4) 接続詞助詞では、繰り返し動作の場合は、成績上位になると、「と」の使用が見られるが、中位群、上位群共通に見られる傾向として、「～て」が多い。

## 6. 今後の課題

本稿では、物語文の再生文に時間的表現がどのような形で再生記述されているかを概観した。今回は、接続関係に関する誤用に関しては全く触れていない。今後の大きい課題としてこの誤用をどのように扱うかを、検討していきたい。又、接続関係にしても、ある類型化ができる。この類型を見ていくと、時間的表現の発達のなプロセスが見えるのではないかと考える。いずれにしても、時間的表現の再生時の内的過程を明らかにするための資料の集積が今後の課題として残されている。

## 参考文献




- Thorndyke 1977 *Cognitive Structures in Comprehension and Memory of Narrative Discourse* *Cognitive psychology* 9.77-110
- B. Heaton. 1966 *Composition Through Pictures* Longman
- P. N ジョンソン=レアード, 海保博之監修 1988 『メンタルモデル』産業図書
- 阿部純一, 桃内佳雄他 1994 『人間の言語情報処理』サイエンス社
- 内田伸子 1993 「読み, 書き, 話す過程で生じるモニタリング」  
『現代のエスプリ』No.314
- 1983 「絵画ストーリーの意味的統合化における目標構造の役割」  
『教育心理学研究』第31巻 第4号
- 坂原 茂 1985 日常言語の推論 認知科学選書2 東京大学出版会
- 杉本 卓 1989 「文章を書く過程」『教科理解の認知心理学』新曜社
- 鈴木高士 1989 「既有知識と文書理解」『教科理解の認知心理学』新曜社
- 坪本篤朗 1993 「条件と時の連続性」『日本語の条件表現』益岡隆志  
くろしお出版
- 寺村秀夫 1982 『日本語のシンタックス』くろしお出版
- 栃木由香 1989 「日本語学習者のストーリーテリングに関する一分析」  
『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第5号
- 桃内佳雄 1987 「物語文章における事態間の時間的關係表現について」  
情報処理学会自然言語処理研究会資料 62-4
- 1987 「文書生成における接続詞の生成方略について」  
情報処理学会自然言語処理研究会資料 62-3
- 1992 「複文における事態の時間構造について」  
北海学園大学工学部電子情報工学科紀要

## 〔資料1〕

R1	R1	R2	R3	R4	R5	R6	R7	R8	R9	R10	R11	R12	R13	R14
	成 績 下 位													
1 ある日のことだ。												C1		
2 大きな木がある。														
3 おじいさんが木の下で休んでいる。	S2	S3		S1	S1	S1	S1	S1	S1		S2	C1	S1	S2
4 おじいさんの近くに帽子のかごがある。	S3	S2												
5 木の上で狼が遊んでいる。	S1	S4	S1	S3	S2	S2	S2	S3	S2	S2	S1	S1		S1
6 おじいさんは帽子を売っている。				S2				S2		S1				
7 おじいさんが眠ってしまった。	S4	S4	S2	EC1(C1	C1	C1	S4	C1			C1		S2	S3C
8 狼が木から降りてくる。														
9 狼がおじいさんの帽子を取る。		S5	S3	C2	C1			C1	C1		C1	S1	C1	C1
10 木の上で帽子をかぶって遊ぶ。	S5	S6			S3	C1	C1	C1	S2				C1	
11 おじいさんが起きる。			S5	S4		C2	C2	C2			S2	C2	C2	C2
12 帽子がないことに気がつく。			S6	S5				C2			S3	C2		
13 狼がその帽子をかぶっているのを見る。		S7	s4			C2	C2	S6			S4			C2
14 帽子を取り戻したい。		S8										S2S	C2	
15 おじいさんが怒る。	S6		C1						S4		S5	S4	C3	S1
16 狼がまねをする。(怒る)			C1		S4				S5		S6	S5	C3	
17 狼は帽子を返さない。										C2		S6	C4	C3
18 おじいさんが困る。(頭をかく)					C2				C3	C2		S7	C4	C3
19 狼がまねをする。(頭をかく)	s7	S9			C2	S3			C3					
20 狼は帽子を返さない。					S3						C2			C4*
21 おじいさんは考える。					S5				S6		C2	C3	S3	S4
22 おじいさんが帽子を捨てる。	S8	S10	S7		S6	S4			S7	C3	S7	C3	S4*	S5
23 狼がまねをする。(帽子を捨てる)	s9	S12	s8	S7	S7	S5				C3				
24 帽子がおじいさんに戻る。		S13										S8	S5	
25 おじいさんは喜ぶ。						S6								
26 物道外表現		S1		S6	s4			S5	S3	C1/4				

R15	R16	R17	R18	R19	R20	R21	R22	R23	R24	R25	R26	R27	R28	R29	R30	R31	R32	J1	J2	J3	J4		
成績 中位						成績 上位												日本人					
S1	C1					C2		C1					S1	C1	S1								
S2	C1'	C2'	C1	C1		C2	S1'	C1	C1	C1	C1	C2'	C1	C1				C1	S1C	S1C	C1		
S3	S1	S1	C2	C3'	S2	S1	C1			C1	S1	S3	C1					S1	S3	C2'	S2		
C1'	C1	C1	C1	S1C1'	C1	S1	C1			C1	C1'							C1	S2	C1	C1	S1	
S1	C2'	C2	C2	C4'	C1C2	S1	C3			C2	C3	S1'	C2'	S2	C2'	C2	C1	S2'	S1				
C2	C3	C3				S3				C4	C2				C1	C3		C2					
C1	C2	C3	C3	C3		C3	s3	S2	C3	C2	C3	C2			C1			C2	C2				
		C3	C3			C3	c2	S3		C2	C4				C1	C4'	C2	C2					
C2	C4	C4	C4	C4		C5	S3'	C4	c2	C2	C4	C3	C5	C3	C3	C2	C5	C3	C3	C3	C3		
S2	C4					C5	S4		c3	C2					C2						C3	C3	
C2	C3	C5'		C4		C6'	S5	C4	s4	C3'				C3	C4			C3	C3	C3	C4'		
S6	C4								c4					C4				C5					
S5	C5	C4							C5'	S4				C4	C5	S2		C3	C6	C4'	C4	C5'	C5'
									C6	S5	C5							C4	C6	C5'	S4	C6'	C6
S1	C6					S2C'	c5					C5	C6	C4'				C4					C6
S6	S2	C5'				C7	c6			C5tar	C5	C6	C4					C7'			C5	C7	C7
				S1														C5'	S1	C6'	C5	C7	C7
		C6				C7	C7	C8	c7			C6	C7'	C5	C6								
S2	S7	S3	C6	S2		C7	C7	C9	c7	C4	S1	C6	C8'	C5	C7'	C5				S5	C8'	S3	
S3	S8	S4	C7'	S3		S2		C9	c7	C4	C6	C7	C9	C8	C8	C6	S2C	C7	C8	S3C	C8		
S4	S9		C8'	S4		S6						C6	C7		C6			C8	C7	C6	C9	C8	
			C6'			S7												S3	C8	C6	S4	C9	
																			C9'				C9

Sは単文，Cは複文，数字は再生文に記述されている順序を表す。

-  - 2つのIUにまたがっているもの
-  - 3つのIUにまたがっているもの
-  - 4つのIUにまたがっているもの

